

KISS § ICK

- It's a beautiful day -

shiroa

standing up

―― 元気になれる物語があります。

悲しいお話。苦しいお話。辛いお話。
そんなお話が読みたくなることがありますね。

けれど時には、気持ちが晴れるような、明るいお話はいかがでしょうか。

この本には明るい、感動的な、元気になれるお話ばかり集めています。

タイトルを見て、気になる話だけ読んでみるのもいいでしょう。
好きなお話ばかり、何度も何度も読むのもいいでしょう。

ひとつの物語はどれも短いものばかり。
ちょっとした時間に、ちょっとした清涼な気分転換に。

この物語たちがあなたのお役に立てば幸いです。

～ ☆ ～ ★ ～ ☆ ～ ★ ～ ☆ ～ ★ ～ ☆ ～ ★ ～ ☆ ～ ★ ～ ☆

このお話の一部は『今日もいいね！』というYoutubeのチャンネルでテキスト映像化されています。
よろしければ併せてご鑑賞下さい。

>Youtube cannel 『今日もいいね！』

<https://www.youtube.com/channel/UC0HxTEy9iZNoKshVUxXQCKw/>

contents

story:

- 01 愛犬ホームズの推理
- 02 月の魔法
- 03 公衆電話
- 04 突然の豪雨で
- 05 不思議な気分のハロウィーン
- 06 愛犬ホームズと指輪
- 07 魔法がかかったショートケーキ？
- 08 夫の裏切り？
- 09 母からの手紙
- 10 デンリソウがつなく恋
- 11 娘へのニット帽
- 12 スイカのたね占い（？）
- 13 愛犬ホームズの序列
- 14 母の扇子
- 15 花束を描く
- 16 魔法を仕掛けたショートケーキ！
- 17 愛犬ホームズの仲人

story01 愛犬ホームズの推理

私たちの部屋にホームズがやってきた。
ホームズはヨークシャー・テリア。
イギリス紳士の気品を感じさせる彼には、この名がぴったり。
私の彼は「ワトソンは？」と言ったが私は即刻却下した。

そんなホームズがやってきて、一カ月が経つころ、ミステリーが起きた。
テーブルに置いていた私のアクセサリーが消えたのである。
一度や二度ではない。
彼に聞いてみても知らないという。

私は密かに彼がお小遣いを作るために、私のアクセサリーをくすねて金に換えてるのではないか？
そう推理していた。

ある時、ホームズに私のアクセサリーのにおいを嗅がせ、「私のアクセサリーを探して！」と頼んでみた。まさか、警察犬でもあるまいし。言葉が通じるわけでもない。
遊び半分だったけど、ホームズはワン！と元気に吠え、洗濯機の方にかけていった。
そしてしっぽを振り、顔を洗濯機の下に突っ込むのである。

私がそこをのぞくと、失くなったアクセサリーが！
それだけではない。私が使っていた髪止めのゴムや、消しゴムまであった。
どうやら私のおいのする物を集めていたらしい……。

かくして、名探偵ホームズは見事に事件を解決。
そして、犯人はホームズだった。

この話を帰ってきた彼にすると彼も吹き出した。
そこで私は彼に一言付け加えた。
「きっと私が大好きで、そのにおいのついたものを集めてたのよ。隠し場所にはあなたの物は一つも無かったわ！」
「おい！俺のことも好きになってくれよ！」

ホームズの活躍が今後も楽しみだ。

story02 月の魔法

由美子がまた月を眺めている。

残業で遅くなると、彼女はいつもそうだ。
姿を消したと思ったら、
決まって窓から月を眺めている。

「ねえ、なんでいつも月を見てるの？」

私は訪ねてみた。

「月には魔法があるから、かな？」

ちょっと驚いた。
由美子って、こんなメルヘンチックな子だったかしら？
シビアでリアリストだと思ってたけど。

「へえ。どんな話？」

「あたし、母子家庭に育ったんだけどね。
パパはどこ？ って訊ねたら、
いつもママはこう答えるの。

パパは月に居るって。

だからすぐに帰ってこないんだって。

もし何かあったら、
月を眺めて話しかけてごらん。
そしたらパパが聞いているからって。

そんなの、子供だまし。
すぐに嘘だって分かった。

でも、嘘に気付いてからも、月を見てると、
不思議と心が落ち着くのよね」

由美子がにこりと笑った。

「時々、辛いことがあったりすると、
月を眺めながら心の中でグチをいうの。
そしたら、なんか心が落ち着いて。

迷信かも知れない。けどね。
きっとこれは魔法だって思うのよね」

「へえ、なんかいい話じゃん」

きっと月の魔法は本当にある。
信じる心が、魔法を生むんだから。

私はにこりと微笑み返した。

story03 公衆電話

ティリリリリリ、携帯が鳴った。

発信者は「公衆電話」と出ている。
これは彼からの電話をあらわしている。

「もしもし……」

だいたい毎日、彼は夜、ウォーキングにでかける。
そしてそのウォーキングの間、外に出ている間に、私に電話をかけてくる。

携帯電話を使わないこと。
家の電話を使わないこと。
それによって私という存在を、家族に悟られないようにしているのだ。

それにしても今だ公衆電話があるというのに驚く。
電話がまだ珍しかったころ、きっと公衆電話は恋人たちをつなぐ貴重な赤い糸だったはずだ。

公衆電話が廃れた今でも、
個々に携帯電話を持つのが当たり前になった今でも、
公衆電話は私と彼をつなぐ赤い糸になっている。

公衆電話はやはり貴重な存在なのだ。

彼と付き合いはじめ3カ月くらい。

ある時、見知らぬ番号から電話がかかってきた。

恐る恐る電話に出ると、彼の声。

「びっくりした？ これ、家の番号だから知らなかったよね。家族に君のことを話して、公認になったから。これからは家から電話するよ」

ふわっと頭のうしろが軽くなって、ちょっと宙に浮いた気がした。

なんか、ぐっと、鼻が苦しくなった。

「で、悪いんだけどさ、今度遊びに来て。うちの親が会わせろってうるさくてさ」

私はすぐに返事をした

「うん、もちろん！」

— 公衆電話はもう、卒業みたいだ。

story04 突然の豪雨で

ラブレターを渡そう！
そう思っていたら、もう放課後。

せめて今日の帰り道、
人目につかないところで。

そう思っていたら、すでに彼女の姿がない。
友人にたずねると、

「ああ、さっき帰ったよ」とのこと。

まったくついてない！
僕はいちろの望みを託し、
追うように学校を後にした。

駄菓子屋までは、同じ道。
それまでに追いつくことができたなら。

——そこへ、
急に曇ってきたと思ったら、突然の豪雨。

制服は濡れて体に張りつき気持ちが悪い。
新しい靴も中敷きが水溜りだ。

鞆の中は防水になっているから、
手紙は無事だと思う。

せめて学校を出る前ならば、
置き傘があったのに！

「ああ、なんてついてないんだ！」

と、その時。
僕の胸はどきっと強く波打った。
駄菓子屋が見えたのだが、

そのひさしの下に彼女が、いる。

雨宿りしてたんだ。

僕もひさしの下に飛び込み、
「ひどい雨だね」と声をかけた。

「ほんとう、動けなくなっちゃった」

最悪な日だと思ったけれど、
最高の日になった。
雨が、彼女を足止めしてくれてたんだ！

「あ、晴れてきた」と彼女。

ぱっと空は晴れ、遠くに虹がかかった。

僕は今だと思い、鞆から手紙を出すと、
思いをこめて彼女に差し出した。

story05 不思議な気分のハロウィーン

ハロウィーンだとはりきって家を出た子供たちをみて、微笑ましく思う。
私も子供のころ、同じことをしたな。

――その時好きな男の子と一緒に、近所の家を回って歩いた。
まだハロウィーンが珍しかった頃だ。

“トリックオアトリート”

大人にいうと、お菓子をくれる。
外国にはなんて楽しい祭りがあるんだろう！
その時はそんなこと考えてた。

家に帰り、彼と戦利品を見せ合いっこした。
その中にペアの人形があつて。
2人でずっと持っていようね、
そんな幼い約束を交わした――

子供たちが帰ってきた。
笑顔で一杯だ。
かごにはお菓子が盛りだくさん。
「よかったね！ たくさんもらったね！」
娘が大きくなずいた。
「ねえ、ママも一緒にみようよ！」
子供たちと共にお菓子を見ていると、中に古びた人形が混じっていた。

瞬間、電撃が走った気がした――

私はもう、とっくの昔に捨ててしまった。
新しい恋人と結婚してすっかり忘れていた。
約束の人形、それが混じってた。

彼はこんな近所に、まだ住んでたんだ。
娘が持ちかえったお菓子に、不思議なえにしを感じた。

そんな、気分のハロウィーンになった。

story06 愛犬ホームズと指輪

ヨークシャー・テリアのホームズ。

英国紳士のような、凜とした雰囲気を持っている、なんともかわいい我が家の愛犬である。

私の誕生日まであと2週間。そんな折、私は偶然見つけてしまった。彼が誕生日にプレゼントしようとしているであろう、指輪である。

プラチナに、ダイヤがのっけていて、これはもしや……？！

想像すると舞い上がってしまった。

ちょっぴりサイズが大きめなのが気になるが、秘密にするため私に黙って買ったのだろうから、まあ許すとしてよう。

よくないと思いながら、ちょっとした悪戯心も手伝って、ホームズのお散歩につけていってしまった。

彼はもう少ししたら、旦那になるのだわ。

なんだか笑顔があとからあとから湧いてきた。

部屋に戻って、指輪がないのに気付いた。

顔を青ざめ身の回りを探すが見つからない。

急いで散歩のルートを探して回ったが見つからない。

部屋に戻り悲嘆にくれ、玄関で泣き崩れた。

そこでホームズが少し開いていたドアから外へ飛び出した。

あっ。

急いで追うが追いつけなかった。

一時間経っても、二時間経っても、ホームズは戻ってこなかった。

いつもの散歩ルート、ホームズが寄り道しそうな脇道。

隈なく探したがみつからない。

日が暮れ、疲れ果てた私は部屋に戻った。

ひとりで部屋にいと、急激に自己嫌悪に陥った。

私は指輪も、ホームズも同時に失ってしまった。

彼に怒られるだろうな。

ああ、最高の日だと思ったら、最悪な日になってしまった！

指輪のことは素直に謝ろう。けど、ホームズは……。

いっそのこと、私も家出をしてしまった方が気持ちは楽かもしれない。
そんな暗い想像をしていると……

わんわん！

聞えたのはホームズの声。
ドアを開けると指輪をくわえ私を見つめている。

こんな奇跡、あるのかしら？！
私はホームズをぎゅっと抱きしめた。
あとからあとから涙が溢れてくる。
ホームズだけでも、と思っていたけど。
ホームズ、あなたはなんていい子なの？！

――彼が帰ってきて夕食の時。
「あれ？ 今日料理作らなかったの？」
「うん、ちょっとドタバタしてて作れなかったから、できあいの物でごめんなさいネ」

私は彼に今日の事件を黙っておくことにした。
これは私とホームズだけの内緒の秘密。
私はホームズにウィンクをした。
ホームズは呆れた顔であくびをしてそっぽを向いた。

story07 魔法がかかったショートケーキ？

娘が作文コンクールで賞を受賞した！

賞を獲るなんて私には無い経験だったから、娘に小さなお祝いをしてあげることにした。夫に協力させればもっといいものが用意できるだろうけど、あいにく夜勤で今は熟睡中。私のポケットマネーで、ささやかながらショートケーキを買ってあげることにした。

午前中に買いに行き、家の掃除をバタバタ済ませ、午後は一番でちょっと自治会の用事を。家に帰って夕食の支度の前に、ちょっと一息入れながら娘の絵のことを母と話した。

「それでショートケーキ買っておいたのよ。サプライズになるじゃない」

母も自分のお小遣いで何か用意してあげなきゃね、と言いながら近所のスーパーに出かけていった。

夕食の準備をしている間、夫が起きてきて、シャワーを軽く浴びると「ちょっと出てくる」と出かけてしまった。

準備が整い、娘も帰ってきて宿題をはじめ、私はその間にお風呂に入る。

その間に母も夫も帰ってきたらしい。上がった頃には先に食事を済ませた夫が仕事にでかける所だった。

父と母と娘と私で食卓を囲み、楽しく食事をして。終わったらケーキを出した。……あれ？

なんかケーキが豪華になってる！

いたってシンプルなショートケーキのはずが、ひとまわり大きくなっていて、チョコプレートまで乗っている！

私がぼかんとしていると、娘はそれを見て

「やった！ ケーキだ！ ありがとう！」

と大はしゃぎ。

もしかしたら神様が魔法をかけてくれたのかしら？そんな不思議な気分になったのだった。

story08 夫の裏切り？

最近、うちの旦那の様子が怪しい。
妙にこそこそしている気がする。

本棚に何故か料理の本が並んだ。
料理なんてする旦那ではなかったのに。
こそこそ電話をしていることがある。
誰？ と聞くと、会社の同僚という。
けれども内容ははぐらかす。

絶対に怪しい。

そう思って旦那がお風呂に入っている際に、こっそり携帯電話を覗いてみた。

メールは……特に怪しいものは無い。
もしかしたらマメに削除しているのかも。
電話は…… ？！
私は愕然としてしまった。
同じ女性の名前が、ここ一週間で3回も並んでいる。
この人と電話していたのか。

で、一体なにを話していたのか……。

そう考えると頭がくらくらしてきた。

問い詰めるべきか、そっとしておくべきか。
私は判断に迷ったが、
結局保留にすることにした。

旦那の裏切りが判明して、より傷つくのは辛い。
今はまだグレーにしておきたい。

一日曜日になった。
毎週通っているヨガから帰り、さて夕食の準備をと思っていたら、

「今日は僕が作ったよ」

カレーライスとヘタクそに盛られたサラダ。

「ケーキも作ったんだ。後で食べよう」

私はぽかんとしてしまった。

「びっくりした？ 今日は出会った記念日。
知らなかったんじゃない？

誕生日でもなく、結婚記念日でもなく、
出会った記念日」

何それ？ そんなの初耳。

怪しい女の存在、実は。
料理の作り方を教わってたわけ？

「はい、プレゼント」

疑ったのがバカみたい。
こんなサプライズを考えてくれてたなんて！

「ありがとう」

私は最高の笑顔でこたえた。

story09 母からの手紙

いつも頑張っているあなたへ

お元気ですか？

こちらは相変わらずにぎやかです。

ひとり家族が抜けるということは、はじめは淋しく思うものですが、いつしかそれが当たり前となりました。

最近ではあなたのことに思いを馳せることが楽しみのひとつになってきています。

昔から負けず嫌いで、これをやると決めたら、途中で投げ出すのが嫌な子でした。

泣きながらもやり続ける姿は、見ていて少し苦しくなるほど。

けれどその分、達成できなくてもスカッと割り切れる。

きっと、それだけ一生懸命に打ち込んでいたから、さっぱりとやめることもできたのかもね。

今でも夢に向かって、ひたむきに努力しているのでしょうか？

そんなあなたを陰ながら応援しています。

自分の信じた道を進みなさい。

頑張りすぎて、体を壊すのではないか。

そんな心配もよぎりますが、あなたの夢は、私の夢なのですよ。

お話してなかったね。

私も流行歌手になりたくてね。

家を出ようと思ったことがあったの。

けど、夢では食べていけない。

そんなことゆるされる時代じゃなかった。

だからこそ、

あなたには自分の好きな夢を叶えて欲しい。

その為にも体はお大事に。

体を壊してしまったら、何もできなくなってしまうから。

今度帰った時には、いろんな話をきかせてちょうだいね。

それがとても楽しみです。

母より

story10 デンリソウがつなぐ恋

「Call you, Call you. こちらエミコ」

午後8時を過ぎたら、私たちの通信がはじまる。

何回目かの呼びかけのあとで、

「はい、こちらマサシ。遅くなってごめん」

彼からの声。

まだ携帯電話が無かった時代。

私たちは無線機を使って、コミュニケーションをとっていた。

――高校を卒業して大学が別々になる。

名古屋と新潟。結構な長距離だ。

別れなければいけないかな。

覚悟してたけど、彼はむしろ目を輝かせていた。

「アマチュア無線の免許をとろう」

そんなの無理、難しいに決まってる。

「大丈夫、4級なら中学生でもとれるから」

確かに。電気が得意な彼の手伝いもあり、そんなに難しい計算もなかった4級に、私はあっさり合格することが出来た。

そして引越しの時、彼はプレゼントをくれた。

それは無線機だった。

「アルバイトで稼いだんだ。

アンテナが高かったけど、これで毎日会話ができれば安いものさ」

それはそうだけど。

本当に名古屋と新潟で通信できるのか？

心配だった。

アマチュア無線4級の免許では、10Wほどの出力、つまりあまり強い電波は発信できないから。

でも、奮発したアンテナが奏功してか。

遠距離という障害を乗り越え、私たちの通信は成功した。

「でもどうしてつながるの？ どうぞ」

「電離層が薄くなるからさ。 どうぞ」

「デンリソウ？ 何それ？ どうぞ」

「テストにでたら。

電波を反射させる空気層だよ。 どうぞ」

「そう言えばあったかな？ どうぞ」

「夜になるとその層が薄くなって、

高い所で反射するから、

より遠くに電波が届くんだ。 どうぞ」

そうか。デンリソウが、私たちの恋をつないでくれたんだ。

―― 携帯電話が無い時代。

私たちはこうして繋がっていた。

story11 娘へのニット帽

―― 押入れの奥に仕舞っていた箱。その中入っていたのは古びたニット帽でした。

私が小さいころ、風邪をひかないようにって。母がニットの帽子と手袋を編んでくれました。けっして上手ではないけれど、温かくてお気に入りでした。

けど毎年使っていると、だんだん小さくなって。
手袋がダメになり、捨てて。
帽子が入らなくなり、これは大事にとっておいて。

大きくなってからも、なんとなく押入れの奥に仕舞っておいたのです。

高校を卒業して家を出る時も、お守り代わりに持って行って。

けど、いつしか。
“今”を見る生活に、“過去”は忘れられて行って。
帽子のことをすっかり忘れてました。

結婚して、子供ができて。
引っ越しして数年が経って、子供が幼稚園に通うようになって。

ふと押入れを整理していると、なんとなく見覚えのある箱。

安もののアクセサリを入れていたと思っていたけれど、入っていたのはニット帽でした。

その瞬間に、みんな思い出して。
母がどんな気持ちでこの帽子を編んでくれたのか、その気持ちが痛いほど胸に飛び込んできて。

私はそれを握りしめると、はじからニットをほどこきました。

そしてこのよれよれのニットで、娘への帽子を編みはじめました。

次の冬に間に合うように。
―― 今度は私の娘を温めるニット帽になるよう。

願いを込めて、紡いでいます。

story12 スイカのたね占い（？）

雑誌を開き、あまりのばかばかしさに、口をあんぐりと大きく開けてしまった。

『スイカのたね占い、今日もハッピー』

スイカのたね占い？ なんだそれ。
占いの内容はまるでゲームのようだった。

- 1、口いっぱいスイカにかじりつく。
- 2、うまきたねだけを取り出す。
- 3、出てきたたねの数で占う。

- | | | |
|--------|---|-----------|
| 1～5粒 | : | がんばろう！ |
| 6～12粒 | : | いいことあるかも！ |
| 13～20粒 | : | ハッピー！ |
| 21粒以上 | : | 願いが叶うかも！ |

もしも割れたスイカのたねが混じっていたら
..... アンラッキー！ 気を付けようね。

ばかばかしい。子供だましもいいところ。
わたしは占いを信じない性質だけど、それにしたって酷い、酷過ぎる占いだと思う。

しばらく時が経って、暑い夏の夜にスイカを食べることにした。
ふと占いのことを思い出し、ばかばかしいと思いつつも、大きな口でぱくりと食べた。

ティッシュペーパーの上に、一粒ずつ丁寧にたねを吐き出していく。

..... 10、11。..... 14粒！

噛んで潰れたたねはひとつもない。

やった！ 「いいことあるかも！」だ！

ちょっと嬉しくなった自分がいて、思わずふき出してしまった。

ばかばかしい占いも、時に悪くないかも知れない。

ちょっと気持ちが前向きになるなら。

そう思って、私はもう一度大きな口で、スイカをぱくりと食べた。

story13 愛犬ホームズの序列

彼は帰ってくるなりホームズを構おうとしたが、残念ながら眠っている。それでも構おうとお腹の下に手を伸ばすと、ホームズは片目を開き「ぐるる」と唸った。

「なんで怒ってるんだ？」と彼。

「動物はお腹が弱点だから、本当に気をゆるした人じゃなきゃ触らせないのよ。だから唸ったんじゃない」と、私は親切に教えた。

ヨークシャーテリアのホームズ。

英国紳士のような凛とした雰囲気を持つ、なんともかわいい我が家の愛犬である。

ある日、彼と賭けをすることになった。

部屋のどこかに記念メダルを隠す。

それを彼が探し、見つけることができたなら、私は彼にステーキをおごる。もし時間内に見つからなければ、彼はフランス料理のコースを私におごるのだ。

「じゃ、スタートね」、賭けは始まった。

いろんな所、細かい場所を彼は探す。あっちこっち探す姿を、私はにやにやと見ていた。ホームズは素知らぬ顔でのんびり寝ている。

5分が経ち、

.....タイムアップ！ 私の勝ちだ。

「ええ?! 一体どこに隠したの?」

私は眠っているホームズのお腹に手を滑り込ませ、コインを取り出した。

彼の驚愕した顔がまた、笑える。

「ホームズは私を主人とってるから、お腹を触っても怒らないのよ」
ホームズの考えている家の中の序列。そこからうまれたトリック。

「じゃ、俺って、この家で、一番下っ端ってこと?!」

そう言って彼は苦笑いした。

ホームズが来てからというもの、我が家は明るくなった気がする。

story14 母の扇子

母が亡くなって3カ月。

色んな身辺整理も終えて、飼いネコのみけとの共同生活にも慣れてきた。

毎朝仏壇にごはんとお線香をあげる。

仏壇の前には母がお気に入りだった扇子を閉じたままお供えしている。

本当は棺桶に入れるか迷ったけれど、形見として置いておこうと思ったのだ。

時々、不思議なことが起こる様になった。

会社から帰ると、扇子が無くなっているのだ。

テレビの前に小さなテーブル付きの座イスがあるのだが、その座イスのテーブルに乗っているのだ。

そんなところに持っていった記憶もない。

はじめは気にしていなかったが、2週間に一度くらいだろうか。2度、3度と起こるうちに、なんだか恐くなった。

謎はある日、氷解した。

ある時、家に妹が遊びに来た。

夕食の支度をしてきている時に、みけが仏壇の前の扇子を加え、座イスのテーブルに運んだのだ。

そしてしばらく座イスに向かい、「にゃーにゃー」と鳴いていた。

妹がそれに気づき、「あら、お母さんが遊びに来てるのかしら？」となんだか嬉しそうにいう。

話によると生前母は、座イスに座りながらテレビを観ている時、たまたま扇子を持ってきたタマに「えらいね」と言ってエサをご褒美に与えていたらしい。

ずっと一緒にくらしていたけど、そんなことがあったなんて。

知らなかった。

「もしかしたら時々帰ってきて、みけにはそれが見えてるのかもね」

それから、扇子が移動するたび、今日も母が遊びに来てたんだな、そう思って心が温かくなるようになった。

story15 花束を描く

今度の絵は花をテーマにしよう。

ある画家はそう考え、絵を描き始めた。

まずは想像で描いてみた。

花らしきものは描けたが、納得のいくものにはならなかった。

そこで今度は本物の花を見ながら描くことにした。

花屋に行き、花束を買う。

それを部屋に飾り、ひたすら描いた。

しかし納得がいかなかった。

自分でもなぜか分からない。

ただ似せるだけならば簡単なのだが、色見や雰囲気なんとなくしっくりこない。

画家はなんとなく胸のもやもやを抱え、数日間悩んだ。答えは出なかった。

花も生気を失い、新しい花束を買いに再び花屋へ行った。そこで画家は心臓を絞めつけられる思いがした。

店の前には以前買いに行った際に担当した店員が立っている。

その時は何も感じなかったつもりだが、今改めてその方を見ると、頭は混乱し、体は異常な反応を起こしている。

恋か？ それかもやもやの正体だったのか？

画家はおすすめの花束を買い、今度は彼女を思いながら花を描いた。

色彩は踊り輝くような光の粒を閉じ込めた、みずみずしい花束の絵が完成した――。

story16 魔法を仕掛けたショートケーキ！

夜勤は苦手だ。日勤だけの部署に異動させてもらえないか……とも思うが、稼ぎを考えるとまだまだ若い間は頑張ろうと思う。

昼間、中途半端な時間に目が覚めることがある。少しお腹も空いたので、冷蔵庫をのぞいてみると、ショートケーキがあった。

一つだけ残っている、ああ、俺の分を残してくれてたんだな。俺はそれを食べると再び布団に潜り込み、夢の中へ。

……浅い眠りの中、階下から妻と義母の声が聞えてきた。

「……賞を獲ったのよ。それでショートケーキ買っておいたのよ」
ふと意識が冴えた。さっきのケーキは娘のための、お祝いのケーキだったのか？

まずいことになった。ケーキは胃の中だ。妻は夕食の準備が終われば風呂に入るだろう。その際に冷蔵庫にケーキを用意しておくか。買い出しの時間を逆算し、俺は起きて準備をした。妻は夕食の準備中だ。

お店に行き、ショートケーキを買おうとした。

同じケーキがあったが、俺はもうひとつグレードの高いショートケーキを選んだ。妻からだけでなく、俺からのお祝いの気持ちを乗せたかったからだ。

家に帰ると計算通り妻は入浴中。その際に冷蔵庫にケーキを仕舞う。俺は準備されていた夕食を食べると、一声かけて仕事に出掛けた。

車の中で思う。妻のことだから、ケーキが豪華になっていたことに驚くだろう。まるで魔法がかかったみたいだって。

そう考えると、なんだか楽しくなってきた。

story17 愛犬ホームズの仲人

ヨークシャーテリアのホームズ。

英国紳士のような凜とした雰囲気を持つ、なんともかわいい我が家の愛犬は、今日はお留守番。連れていけないにはワケがある。

今日は、私たちの結婚式なのだ。

最後の最後までドタバタを繰り返したが、ようやくこの日を迎えることになった。

彼……いや、旦那は緊張しすぎて顔面蒼白である。いい式にしたいと思ってる、けど、いろいろ失敗もするだろう。素人がぶつけ本番で行う一生に一度のショーなのだ。

あとは野となれ山となれ！ と思っている私は緊張とは無縁であった。

さて。式はちょいちょい凡ミスはあるものの、おおよそ順調に進み、披露宴も馬鹿な余興に大盛り上がりとなった。そして仲人の挨拶になり、当初予定していた彼の会社の上司の名が呼ばれる……はずだったが。急に会場は暗くなり、映像が映し出された。

そこに映ったのはホームズだった。

気乗りしないホームズが、カメラ視線でちょこちょこ動く。

その動きに合わせて字幕が出る。

“ま、いろいろあったけどさ。ヤバい時には僕が仲をとりもったわけよ。だって、二人別れられたら、ごはん食べられなくなっちゃうかもでしょ？”

微妙に下手な編集が、笑いを誘う。そんなチャチなサプライズだったけど、なんだか目頭が熱くなってきた。

“これからもよろしく頼むよ。二人仲良くなっちゃ、僕が大変なんだから。あ、そうそう。結婚しても序列はかわらないから、御主人、よろしくね”

どんな綺麗な言葉で飾った、上手な仲人の挨拶よりも、私は嬉しかった。いろんな事件があったけど、ホームズのおかげで乗り切れた気がする。

ホームズは確かに、私たちの仲人だ。

「もう、いつこんなの作ったのよ」

私になじると、旦那は優しく私に微笑み返した。

termination

いかがでしたでしょうか？

今回は女の子チックなお話を集めてみました。

恋の話、占いの話、愛犬の話などなど。

ひとつでもあなたの心に残るお話があれば、幸いです。

できればあなたの傍に。いつでもいられるお話になればと思います。

みなさんが明日もこう言える一日になりますように。

It's a beautiful day !